

2014年7月26日

4つの中野インテリジェンス学校（資料1）—史資料解読連続講座(5)

山本武利（NPO 法人インテリジェンス研究所理事長）

NPO 法人インテリジェンス研究所の課題

- 内外のインテリジェンスアーカイブス、研究機関との交流
 - * メリーランド大学のプランゲ文庫
 - * ジョージ・ワシントン大学の National Security Archives
 - * 明治大学平和教育登戸研究所資料館
- インテリジェンス公文書の発掘と資料公開請求活動
- インテリジェンス・データベースの作成
 - * 占領期新聞・雑誌データベース（完成、現在有料公開中）
 - * 占領期の検閲者リストのデータベース（完成、現在インテリジェンス研究所ホームページ <http://www.npointelligence.com/>で公開中）
 - * 陸軍中野学校関係者データベース（現在作成中、エクセル試作版本日公開）
- インテリジェンス公開講座、講演会による研究成果の社会還元
 - * 諜報研究会、20世紀メディア研究会の開催
 - * 『Intelligence』の刊行（既刊第14号）
 - * 著述・資料集の刊行 — 『占領期雑誌資料大系』全10巻（岩波書店既刊）
『占領期生活世相誌資料』全3巻（新曜社近刊）
- インテリジェンス公開講座、講演会の開催
 - * 「検閲と危機の時代—戦中・戦後占領期から現代まで」早稲田大学オープンカレッジ中野校
2014年9月27日～12月6日
 - * 「日本インテリジェンス史と現代」早稲田大学オープンカレッジ中野校 2015年春学期（予定）
 - * 新三木会（如水会）提携による講演会
- インテリジェンス・ツアーの開催
- インテリジェンス博物館の建設準備

本報告目次

- 1、陸軍中野学校 一陸軍大臣から参謀総長
- 2、陸軍憲兵学校 一陸軍大臣
- 3、大川塾（満鉄東亜経済調査局付属研究所 一陸軍省、満鉄
- 4、敝之館 一外務省
- 5、第5の存在の有無 一中野への集合は偶然か、必然か

1、陸軍中野学校

● 陸軍中野学校廃校までの日本インテリジェンス史の先覚者

初代 明石元二郎 一レーニン側の評価は？

二代 土肥原賢二 一「アジアのロレンス」として恐れられた特務機関軍人指導者、満洲国謀略の影の演出者で東京裁判死刑

三代 影佐禎昭 一汪精衛政権樹立のインテリジェンス謀略の演出・実行者

四代 秋草俊 一秘密戦士の「諜報謀略的人格ノ修練」（秋草公文書）、
岩畔豪雄 一システムの姿勢と志向を持つインテリジェンス活動家の育成

五代 陸軍中野学校の 2288 名の群像 一中野出身者（末端将校）の経験の集大成『陸軍中野学校』の刊行（資料2）

個人としての最高の著述 一原田統吉『風と雲と最後の諜報将校—陸軍中野学校二期生の手記』自由国民社、1973

末代 興味本位ライターによる中野関係者証言・資料の虫食い状態を放置、ビッグデータ博物館の早急な準備開始への期待

● 日本軍ならびに日本人のインテリジェンス活動 一成功と失敗の総括の必要性

* 2つの共産軍との闘い

1、ソ連との満ソ国境線のインテリジェンス戦

2、八路軍との北支、延安でのインテリジェンス戦

* 英米軍との闘い

1、英機関とのビルマ攻防戦

2、米機関とくに OSS とのインテリジェンス戦

2、陸軍憲兵学校

● 確定できない中野での設立年月日 一みじめな戦中の回顧

* 昭和 12 年 7 月 31 日 陸軍憲兵学校令 A 0 3 0 2 2 1 1 7 0 0 0

第 1 条 陸軍憲兵学校ハ憲兵科将校ト為スベキ学生及憲兵教習兵ヲ教育シ並ニ憲兵科下士官タル学生ニ憲兵ノ実務ニ必要ナル學術ヲ修得セシムル所トス

* 当初（？）は麴町区竹早町 3 番地の旧憲兵隊練習所跡に新設 『日本憲兵昭和史』961 頁

* 学校の生徒募集開始 1936 年

1945年11月26日の戦略爆撃調査団の「東京中野区のインテリジェンス教育」尋問 ―ノザキ・タツオ中佐の回答（資料3）

1945年11月17日の「憲兵隊活動」への尋問 ―ヤマムラ中佐、オガタ少佐の回答

- * 憲兵学校では本土、朝鮮、満洲、フィリッピンなどでの憲兵将校教育
- * 中国、満洲、マレーには憲兵教習所あり

● 陸軍中野学校との関係

- * 同一敷地で隣り合わせ
- * 憲兵学校は公然
- * 中野学校は非公然・偽装 一部隊名、門札、制服、家族との音信
- * 戦後、憲兵学校出身者が自らを陸軍中野学校出身者と誤解するもの多い
- * カリキュラム上の相違点

憲兵学校では前線や占領地で、スパイや防諜活動のための教育を行うが、中野学校のような幅広いインテリジェンス活動のための教育は行わなかった（ノザキ・タツオ中佐の回答）

● 戦局の悪化と両学校出身者の共同作戦

- * 中国戦局の推移による任地、任務の変化／ 北支那憲兵隊司令部の再編／ 中野出身者の将校、下士官の全員参加の北支那特別警備隊の編成 『陸軍中野学校』290
- * 山崎重三郎「華北剿共治安戦と情報工作」 同台経済懇話会編刊『昭和軍事秘話』中巻255
- * 満州国の特務機関活動への憲兵隊参加 西原征夫『全ハルビン特務機関』236

● 憲兵隊OBが触れたくないゾルゲ事件

- * ゾルゲの活動期とくに大きなインテリジェンスの収穫期は日本のインテリジェンス機関学校の誕生期であった。とくにゾルゲ逮捕を警視庁に奪われた憲兵隊の最大の屈辱事件である。
- * 全国憲友会編『日本憲兵正史』1976年は全1450頁で「国際諜報団ゾルゲ機関」にわずか10頁しか割いていない。
- * 大谷敬二郎『昭和憲兵史』1966年は全802頁で「とらえられなかったゾルゲ事件」に6頁だけ充てた。ただしゾルゲは「わが国における最高の機秘密は、最も正確に入手しておったのである。警視庁の検挙によって、その活動は終止符を打たれたが、日本の防諜機関は憲兵をも含めて、すっかり鼎の軽重を問われてしまった」（380）と反省と屈辱をわりあい率直に語っている。

3、大川塾（満鉄東亜経済調査局附属研究所）

1938-1945 鷺宮1丁目405番地（旧北畠子爵邸）に大川周明の設立した青年教育のための学校。大川学校とも呼ばれる。太平洋戦争時に南方とくにビルマのインド前線の軍、領事館、商社などに通訳、情報員として派遣される。卒業生95名。1939年に目黒区上大崎に校舎は移るが、瑞光寮として鷺宮で終戦まで存続。（資料4）

● 英軍収容者での1期生の供述 Intelligence Bulletin No.232

陸軍中野学校出身者よりも英米機関の尋問に協力的。その名や活動内容の実態がその数が少ないにもかかわらず、把握されていた。

* 大塚寿雄

1938年外務省で面接。20名の合格者と鷺ノ宮の寮に入る。翌年目黒駅近くの新校舎へ移る。衣食

無料。喫煙・飲酒禁止。5時半起床。英語、第2外国語必修(38年度マレー、タイ、ヒンドスタン、フランス)(39年度ペルシャ、フランス、アラブ、ヒンドスタン、トルコ)。マラリア予防を学ぶ。マレーの地理、戦略、インド経済地理など毎週2回将校の講義。

松井大将などの日本精神講義。相撲、剣道を学ぶが、軍事教練なし。生徒の名前を列挙。

* 須藤和夫

外務省職員として国際問題などを学ぶ。インドで働きたかったのが、ヒンドスタン語を選択。インドへきてしゃべれるようになる。カルカッタの領事館(岡崎勝男)で特段の指示がなかったが、財務課の所属。なぜそんな仕事のために大川塾で勉強したか分からなかった。日本を離れて、塾とは接触なく、日本への通信は両親のみ。開戦後、光機関員となる。

● 大塚寿雄の1995年の証言

東亜経済調査局附属研究所へは「叔父に勧められました。授業料なしで勉強できる、しかも小遣いまでもらえるというものです」。募集要項で印象深いことは、「係累のないこと、顔に特徴のないことなどです。大川先生の名を使って募集することはなかったと思います。当時の私は、大川先生を認識していなかった」「外務省の外郭団体であるバダビアの日本商工会議所に赴任」マレー平定後、マラッカ軍政部、大南公司を経て通訳部隊に応募。光機関での初年兵教育。敗戦後の収容所では、「大川塾、軍協力商社大南公司、特務機関の経歴を持つ私が、光機関の塹壕掘りをやったといっても信じてくれませんでした」

田中敏雄ほか『資料集インド国民軍関係者聞き書き』研文出版

● 1期生大屋敷久雄(拙著『特務機関の謀略』の第1号読者)の証言

2005年6月18日 20世紀メディア研究会(早稲田大学)での証言

「工作人員教育は一切うけていない」「南方の言語、地理などを学んだだけ」

彼の所属した「光機関教育隊では須藤ら大川塾出身者がいた」

* 緑川巡「満鉄東亜経済調査局附属研究所外史」(私家版)ほか多数(緑川巡は大屋敷久雄のペンネーム)

● 2期生小林隆の証言

赴任先は学校ないし軍、外務省から指示させた。「昭和十七年の新年早々、大使館から「ビルマ作戦が始まるので従軍しないかと」といわれた。のんきにタイ語の習得ではあるまいと早速これに応じた。オンジャ行く志願した同僚らと南機関本部に出向すると、南方軍総司令部専任嘱託、南機関付、ビルマ独立義勇軍大尉との辞令が出て、「いわゆる中野学校出身の特務機関員などと行動を共にすることになり、見慣れないビルマ将校の軍服を支給された」。「ビルマ作戦が一段落してバンコクに帰任した私は、休む間もなく、今度は光機関の情報部に出向を命ぜられた」

「南十字星の下で」『みんなみ』5号

● 大川周明の弁明—東京裁判前のE・H・ノーマンらによる予備尋問での返答

Preliminary Interrogation of Ogawa, Syumei ; RG263Box38 CIA Name File

1945年12月26日

陸軍省は1938年の15万円を学校設立にくれた。それは軍務局の岩畔豪雄中佐が実行した。満鉄が5万円、外務省が2万4千円くれた。学校の目的はアジアことに東アジアの情報を日本の視点から集めることである。このために多数のインテリジェンスのある日本人を各地に最低10年間滞在させる。そしてそれらの事情を経済的、政治的、地学的、人種的に徹底追究させる。そうすれば日本はアジア

でリーダーシップを握れる。それを早く達成するには「正直と親切」の姿勢を持たねばならないと教えた。17歳の中卒の若者を全国から年20名集めた。

- * 大川の語学学校は特務機関と無関係である。「情報」とも一切かわらない。その証拠にその学校カリキュラムは戦争が起きてもなんら変わっていない。選抜の方法もそうである。語学学校がスパイの手先となることは断じてない。大川は大塚、大屋敷など卒業生多数の名前と消息をノーマンらに列挙した。

● 戦後の日本学者の批判 一大川研究ではほぼ未開拓の大川塾研究

彼は5・15事件の刑を終えてまもなく大川塾を開設してその所長となる。「この計画は満鉄、外務省、陸軍省からそれぞれ5万円、総額15万円の援助で実施されたもので、名目的には「亜細亜調査の要員を直接の目的」としていた「東亜経済調査局の付属研究所であったが、事實はまさに「大川塾」であった。大川自身植民地やアジア民族運動について講義をしている。いうまでもなくそれは占領地域における工作要員の養成を目的とするものであったし、軍の要請によるものであったことは明らか」

原覚天『現代アジア研究成立史論 一満鉄調査部・東亜研究所・IPRの研究』460頁

● 中野学校と大川塾

- * 中野の存在は連合軍側には戦争末期の捕虜尋問で僅かに知られたが、その名称さえ不確かであった。
- * 大川塾の方はビルマなどでの捕虜尋問から中野よりも知られるようになった。出身者の機密ガード教育がなされていなかったためである。その点、中野出身者は国内外でインテリジェンス機関としての成員の守秘姿勢が固かった。
- * 山本政義、大川塾で講義 山本政義『ビルマ工作と謀略将校 一中野1期生の回想』
玉居子精宏『大川周明アジア独立の夢』平凡社新書

4、敵之館（へいしかん）

1939-1945 主としてアメリカ日系2世を呼び寄せられたが、在日2世の他、日本人学生も参加。戦争開始とともに外務省本庁、調布市国領などで傍受をおこなう。終戦とともに財団法人ラヂオプレスとなり、1回生が理事長などの要職について、主として鉄のカーテンの社会主義国ラジオの傍受情報で国内メディアや外務省や防衛関係の顧客を開拓。現在は新宿区戸山で北朝鮮情報を売り物にして活動中。

● 敵之館ニュース、第1号、1940年8月10日（資料5）

- * 1939年12月1日設立 中野区高根町12番地（東中野駅近く）
- * 生みの親 河相達夫外務省情報部長、「満鉄、同盟通信社と協議」して設立
- * 表向きの目的 「英語力という武器」により「正確に英米に紹介」し、「日米及び日英間の親善」のために貢献する「二世養成所」

● 1、2回生ら4名への集団インタビュー（山本武利）（資料6）

1回生 中田格郎、荻島良一

2回生 浴本正生、上原昇 1995年7月10日

（山本武利「ラヂオプレスの誕生と発展」『占領期メディア分析』144頁に一部収録）

- * 満鉄、同盟の出資

「学校の成績がよくても、当時は反日感情が強くて就職できないので、日本へちょっと勉強にゆきた

い」

「募集当時の領事館の話では、日米関係のために働くのが目的、2年間勉強をしながら外務所の仕事を手伝う義務がある」「外務省が指定したところの仕事が終わったら、自由になる」「学校に行きながら、みんな交代で、ラジオを聴くのを手伝う」

「みんな二重国籍であった。敝之館にとって二重国籍では困る。日本の国籍の離脱を言われる。日本軍にとられるのは困るからだ」

「月に一回出頭するようにいわれて、中野署長とも親しくなった」

「日本のことについてはなんにも知らない二世だからといって、日本へ行って、日本語、礼儀作法その他を勉強させるからといって、実際、樺太から台湾まで見学させてもらった。日本製鉄、三菱造船などすべて見せていただいた」「二回生は入学したとき、戦争が始まっていたので、国内旅行だけ」

* 12名学生視察 1941年10月6日軍需工場 三菱重工名古屋航空機製作所、トヨタ自動車本社工場（アジア歴史資料センターの資料「軍需品工場参観の件」C04014862000）

「同館は一～五回生で六十八名の入学者があったが、卒業生は三十九名にすぎなかった。同館は一般教育のみで、ラジオ傍受や暗号解読の教育は行わなかった。しかし四三年から同館の外務省側責任者となった奈良靖彦の証言では、教育活動はほとんどなされず、在學生はラジオ室へ通うのが日常生活であり、同館は宿舎にすぎなかった」

* 卒業生の就職先 「敝之館の卒業生は外務省のラジオ室の他には、満鉄、満州放送局、同盟」。戦争が始まるとラジオ室のみ。

「国語、歴史中心の講師陣、ラジオ傍受やインテリジェンスの講義なし」。

「外務省としては公館とか、大使館とかみんななくなったので、できるだけ各国の放送局のニュースをキャッチしたい。当時、我々が一番重視したのはおそらく、BBCであったろう。一番権威があったからだ」

「僕らは受信所からなるべく離れないようにしていました。あそこから情報が出ていると言われたら困るからね」

「重要なニュースはすぐ日本語にして、連絡官の二階堂進さんに渡し、それを外務大臣なり情報局長、広報部長へもって行く。聞くところでは、二階堂さんはポツダム宣言のときは、東郷大臣はそれを陛下へ直接もって行った。それで初めて御前会議になった」

● 外務省のねらい

* スクープ 「日本、プロパガンダ要員としての二世の募集」日系紙『同胞』1939年8月15日付英文版

桑井輝子「友情と友好を結んで一敝之館からラジオプレスへ」『海外移住資料館研究紀要第4号』
「政府の奨学金プログラムという隠れ蓑のもとに公式の宣伝機関要員訓練のたまに二世を募集するという、一層、露骨な国粋主義者育成の計画を進めていた。一九三九年に非公表のうちに設置された敝之館という寄宿学校は、外務省情報局長であった河相達夫が発案したものであった」

東栄一郎著、飯野正子監訳『日系アメリカ移民 二つの帝国のはざままで』2014年、263頁

* 敝之館出身者のインタビューから

「敝之館の創立と経緯についてはわれわれ二回生とか、三回生、四回生、五回生もいますが、自然的にみんなラジオ室に行ったというようなことになるわけです。これは考えようによっては、一つの

自然の成り行きでしょう」

* 労をねぎらい終戦直後、敝之館の関係者が中心となったラヂオプレス（ラジオプレス）の創立、発展に外務省が全面支援

5、第5の中野学校ありや、なしや —なぜ中野に集中したのか

* 日米ホーム、日米学院 中野区千光前町10番地（中野駅から徒歩4分）1934年落成 一敝之館とは直接関係ないが、浴本正生のように敝之館に入る前に日本語の勉強に日米学院に通う者もいたようである。

* 早稲田国際学院も日米学院に近い活動をしたが、中野区には所在しなかった。

* 山手線外の交通至便地域、大きな空間

* 豊多摩刑務所など暗い風土